

よって、教育大臣も最近では学校の中で個人対応、個別化された個別指導を強調するようになってきている。子ども達のそれぞれの特別なニーズに対応するための学習経験を保障していくという言説が語られている。

3番目の基準は、個人対応化に多少関連があるのだが、差異化ということである。これは他者に対するサービスとは区別してほしい、とりわけ危険な他者からは切り離してサービスしてほしいという要求のことである。ここで言う危険な他者とは、とりわけバタシーの保護者にとっては、ワーキングクラスの子供達で、彼らは自分の子供達がワーキングクラスの子供達と学ぶということを好まない。

このように、学校の教育の中で今では多様な教育ということが非常に語られるようになってきている。政府はすべての学校をスペシャリストスクールにすることを強調している。すべての学校で異なるカリキュラムを与えて、異なる労働市場に向けて用意させていくということを強調する。また、公立学校の中で宗教的要素を強調する信仰的な学校を強調するようになってきている。さらにアカデミーと呼ばれる学校があり、それはビジネスや宗教団体から支援を受けている学校であるが、排他主義的、個人主義的な保護者達に対して、貴方が望むなら特別な専門的な学校に通わせて、他者から区別された排他的な学校に子どもを通わすことができますよと言っている。また、学校の中でも差異化、多様化といった流れが強調されるようになってきていて、才能ある有能な子供達に対する教育提供、能力別学級編成、セッティングなども益々強調されるようになってきている。

これが問い4に答えようとした私の試みであり、現代的な国家においては、管理職型ミドルクラスが福祉国家に対してどういう関係をとろうとしているか、そして福祉国家が逆にそのグループを取り残さないために彼らのニーズに対応しようとしているということをお答えした。

問い5,6,7に対しては来年お答えしたいと思う。

上田：一通り質問に対するお答えを出していただいたということで、ここで休憩を入れさせていただきます。

西岡：セッティングは能力別学級編成ですので、説明を加えさせていただきます。

上田：後1時間ほど残されておりますので、有効に活用していきたいと思う。大田さんに対する質問でも、あるいはボールさんに対する質問でも、また違った意見を持つ

ているという開示でも結構です。

図 1

Social Class

	構造（職業）	規範（価値観、ライフスタイルなど）	社交関係、友人、
リベラル美学型 Liberal Aesthetics	専門職 社会福祉 医師 古いタイプのメディア	旧来の福祉国家タイプ ワイン	
ポストモダン Post Modern	シンボリック・アナリスト	何でも吸収	オープン、混合 公的参加
管理職 Corporate	財政、ビジネス関係	ネオリベラル ウイスキー	閉鎖的、排他的

図 2

古い社会福祉

普遍主義
公正
社会賃金
労働者階級

新しい社会福祉

基準
パーソナリゼーション
個別対応型
ミドルクラス
差異化

柳田（青山学院）：黒板にニューウェルフェアの下にミドルクラスと書いてあるが、これは正確にはミドルクラッシューズなのか。

ポール：そうです

宮島（西部文理大学）：コーポラティブミドルクラスが教育的に囲いをして、凄くアイソレーションを好むということが分かったが、トムリンソンレポートが破棄された背

景にはそのようなサービスクラスの影響力が強かったから、今回バカロレアが入らなかったのか。トムリンソンレポートというのは2004年10月にファイナルレポートが出て、アカデミックのコースとボケーショナルなコースを統合しようということで、GCE-A レベルを実質的に廃止して、バカロレアという新しいディプロマを作ること、を制度的に導入しようと企図していた。それを政府は基本的にまだ時期尚早だということで、2005年2月に白書を出して却下した。昨日配布された紀要の佐々木先生の「イギリスの動き」にも書いてあったが、一応、CPIのほうは大賛成だといっていたが、教育界では落胆の声が大きかった。そのことが大田先生の5番目の問いにもつながらんと思うが、政府の思惑とミドルクラスの思惑は一致するのだろうか。この場合、政府はミドルクラスを第3のコーポレートグループに捉えたのだろうか。

ボール：貴方のご意見は正しいと思う。トムリンソンレポートは国家が国際競争力を高めると同時に、統合するような平等主義を推進したいという国家の意思を反映していたわけであるが、それを却下したということは、選挙におけるコーポレートミドルクラスといわれている人々の投票行動に対する配慮がなされたからだと考えている。昨日も強調したように、国家というのは決して単一の行動原理をもっているわけではなく、経済的理由と政治的理由が時に矛盾するのであり、どの時点でどちらを優先するかは変わっていくということが起こる。

宮島：そうすると、将来的に今回、上も下もアカデミックと職業は統合したほうがいいんだといっている時に、政府は選挙を見据えてせっかくのそのチャンスを逸してしまったと思うが、そのことが結果的にイギリス社会にどのような影響を与えていくのか、あるいはイギリスの社会はどのようになっていくのか。ひょっとしたら日本のように、先ほど大田先生が言われたようにほとんど公の力がなくなってしまって、民間部門が力をもってしまうようになるのではないか。それが言い悪いは別にして。

ボール：もう一度強調しておくことが重要だと思うが、政府は時に二元的な要求を持っている。一つには高等教育の拡大、参加、とりわけ社会経済的に低い階層にいるグループに対して高等教育を拡大していくということにコミットしている。高等教育に行くことの経済的価値も実現しようとしている。しかし同時に大学間の違いというのは維持されていて、とりわけ外部資源による資金の現状というものは大きな違いがあるわけだから、政府は拡大政策をとりながら差異化したままでおいておくという矛盾

した政策をとっていることになる。そのような二元性のもう一つの例は学校にも見出される。一方では伝統的な教育のあり方を強調しながら、片方では革新的な教育のあり方を強調している。具体的にはニューレーパーは学校に制服を再度導入するのに熱心であるのに対して、同時にコミュニティとの関わりも強めるという意味でITも極めて重視している。かれらは伝統的であると同時に革新的であるという行動もとっている。

こういう政策というのはある部分のミドルクラスの関心というものを反映しているのであり、片方で伝統を維持しながら、片方では現代的な世界に対応していくというミドルクラスの意識を反映している。

もう一度最初の質問に戻っていいだろうか。先ほどの問いは、話全体の重要な側面に関する部分に私の意識を向けてくれたし、それはここで最も強調しておくべきことである。それは先ほどから述べてきている様々なミドルクラスの中にある様々な違いにもかかわらず、ミドルクラスのこういったフラクション（断片的グループ）に見られる共通的な価値観も同時に存在しているということである。とりわけ児童福祉 (child care) に関して見られる鍵となるような共通性の例としては、子どもの機会や可能性というものを最大限にするということに対するコミットメントの強さである。何が子どもにとってベストなのか、才能を伸ばすのにどうしたらいいのか、個人として子どもを扱っていくということが共通して見られる。この断片的グループというのは、それを具体化するかという事に関して解釈の違いを示しているが、一人一人の子どもを特別なユニークな存在である個人であるととられる点では共通している。これは具体的には頑張っってやっっていく (Getting on) というような言葉に表れていて、昇進するようにがんばる、教育を一生懸命するようにする、自己実現 (fulfilling yourself) をしていくというようなところに現れてくる。

もうひとつミドルクラスを定義する特徴としては責任を強調するということにある。彼らは何らかの責任を果たさなければならないと強く感じているのであるが、その解釈に違いがあって、リベラル美学型グループは社会的な方向性でこの責任を解決していくわけであるが、管理職型グループはより個人主義的な方向性でこの責任を考えている。

このふたつは実は、3つ目の定義づけに関わる特徴にかかわっており、それは罪悪感である。何しろ家族を常に向上させる、自分自身を向上させる、社会に貢献するといったことを一生懸命やろうとすることの裏返しとして、決して十分にできていないんだというような罪悪感を感じる仕組みになっている。あなた方自身の中にもそうい

うのがあるというのを認識されるだろうか。

宮島：トムリンソンレポートが拒否されたことによって、理想とされる社会の実現にまた一步退いたと思うのだが、そうになると将来どうなるのか。

ボール：確かにトムリンソンレポートを却下してしまったというのは、近代化に対する失敗であり、結局、教科システムを二元化したままになったことは、現代社会では益々関連が薄くなってきているアカデミズムと職業教育との分離を維持する時代錯誤的な結果になってしまったといえる。これは単にシニカルな選挙対策によって現代化に失敗してしまったということだと思う。ある意味これは例外的な政治状況だったと思う。というのは、レポートを書いたトップのトムリンソンというのは視学官のトップであり、ニューレーバーによって非常に信頼されている人であったので、アカデミックな人であれ、ジャーナリストであれ、みんながこのレポートを受け入れられるだろうと予想していたものであるから、非常に予想外で、このようなことは全く想定外であった。

大田：コーポラティブミドルクラスに遠慮してレポートを拒否したならば、コーポラティブミドルクラスというのが今の労働党政権の中心的アイデアになっているということなのだろうか。先ほど宮島氏が聞いたかったことは、多くの人が受け入れられるだろうと思ったことを拒否したわけだから、次の選挙で労働党自体が非常に危うくなるのではないか、これで選挙が決まるということはめったにないが、かなりネガティブな評価になるのではないかということだと思うが。

ボール：労働党の政治的立場というのはある意味、保守党との位置関係で理解する必要がある。保守党がなぜ選挙に勝てなかったのかというと、労働党が強くて支持があったからというより、保守党に信頼性 (credibility) が欠けていたからだ。かれらは政策もなければ、象徴するような人物もないからだ。私がイギリスを立つ前にラジオ放送である政治漫画家が述べていたのだが、政治漫画を描こうにも保守党をあらゆる人物がいないものだから漫画が描けないということ saying it.

労働党は何とかこの成功を維持していくことが出来るだろう、伝統的な価値と現代化するという課題とをバランスをよくとりながら何とか全員を幸せにしていけることができるというような考えが見られる。非常に例外的に見られているような現代の政治

的バランスというのはある意味、教育にも反映されているのだが、それは労働党がビジネスに非常に緊密な関係をもっているということであり、したがって、教育の世界においても現代の政策においてはビジネスに関わるような政策、ひとつには、教育の参加が私的な売り買いにかかわってきているということであり、もうひとつは教育の資財と言うものが私的なスポンサーによる経済的支援によるものになってきているということである。

広瀬(専修大学): これまでのお話、おもしろくうかがった。まずシンプルな質問であるが、このふたつに分けた場合、リベラル美学型のほうがどちらかと言えば私のイメージでは伝統的なミドルクラスのイメージに近い。そうするとコーポラティブミドルクラスのほうが、時代の変化に沿いながら新しく出てきたミドルクラスの側面、性格のように理解していいだろうか。

ポール: 誰かが単純な質問ですというときは危険だということを学んできた。だいたいそういのは一番難しい質問である。ある意味、ふたつの断片グループは職業構造を反映していると思う。管理職型グループは、イギリス経済において主流の産業というのが製造業から金融業に変わっていった、つまり金融資本の場が変わっていったということを反映している。彼らの子ども達を製造業のマネージャーとして働かせるというイメージから経済的資本において働く経済人にしていくというふうに考えるようになってきているのであり、それはある意味開放性を反映していると思う。

しかしながらリベラル美学型のグループというのも拡大する傾向にある。そのグループは伝統的な教養階層も含むのであるが、もう一方で、社会福祉の領域で働き始めた人々やメディアの人々というものを含んでいるからだ。1960年代以降、英国においてはミドルクラスが非常に拡大するという傾向があり、対してワーキングクラスは縮小しまったという傾向がある。ミドルクラスの拡大は歴史的なミドルクラスと新しいミドルクラスの両方において見られることであり、新しいミドルクラスを含んでいるというのは、どちらの断片グループにも該当していると考えている。

しかし、このミドルクラスの成長というのは1990年代に止まっている。というのは、社会的な再生産に関する心配が拡大したからである。それはサービス産業においてほとんどスキルを要しないような単純労働者たちが非常に拡大してしまっているということにも関わっている。興味深いのは、ロンドンの先ほどの二つの地域において、どちらの地域の人々もだいたい非常に共通した教育的背景を持っていることだ。非常

に高い率で高学歴であり、だいたい100か120のサンプルのうち、修士号を持っていない人は2人か3人しかいないことがわかった。

広瀬: それに続けて少し違うことも聞きたいのだが、ミドルクラスも時代の流れで変化したというのは分かった。社会の中でいろんな問題が出てきているのが伝えられているが、たとえば、家族の構造が変わってきているとか、子どもの養育の環境も変わってきているが、シングルマザーであるとか、望まない妊娠であるとか、さまざまな人々の行き方の問題が大きくなってきているというのは良く知られている。そういうのは、主としてワーキングクラスの人たちに多く見られる問題のように見られているが、それでいいだろうか。ミドルクラスも変化してきて、たとえば家族構造もやっぱり変わってきているだろうと思うのだが、ミドルクラスにはその種の問題はないのだろうか。それともやはり、家族の問題は労働者階級に特徴的な問題なのか。

ボール: 家族構造の問題というのは、ご指摘のとおり労働者階級に限られているのではなく、ミドルクラスにも見られている問題である。イギリスの調査によると、結婚したカップルの3分の1は離婚するし、今では結婚している年数の平均値が7年にとどまっている。私達がロンドンの2つの地域で行った家族の構成に関しては少し特異な特徴が見られ、実際には1家族しかシングルペアレントの家族はなかった。これは決してイギリスの典型的な状況ではない。このことを説明するひとつの特別な要因としては、この母親達は非常に遅い時期に子どもを持っていることだろう。30代後半になって、長い教育を受けて、キャリアもかなり推進してきて後になって子どもを持っている家庭だということである。よって、法律家とか医者とか会計的な銀行員という話をしているとき、夫のことだけではなく、妻もそのような高学歴で高収入で、高いキャリアを持っている状況である。

このことは子どもを持ち始める母親に大きなジレンマをもたらす。というのは、ミドルクラスのディスコースにおける2種類の言説に引き裂かれるからだ。ひとつは母親として子どもにベストな事をする。もうひとつは自分自身にとってベストを尽くすということで、どちらに優先順位をおくべきなのかということを経験として感じるようになる。結局、3種類くらいに分かれ、片方の極端にはもう仕事を諦めて母親として生きることを選び、もう1つの極としては仕事を最優先するということを決断して、子育てに関しては別の何らかの手立てを打つということを決意する母親がいる。もちろん、その間には一番大きいグループとして何らかの一時的な手立てを打

つ母親がいて、彼女達は仕事を時間を少し減らすとか、何か他の手立てを考える。たとえば週に3日だけ働くとか、2年間働くのをやめてまた仕事に戻る、あるいは一日に働く時間を短くするといったアレンジをしている。そしてこれも驚くことではないが、どのグループに属すにしても彼女達は罪悪感を持っている。仕事を辞めてしまったグループは仕事を辞めてしまったことに罪悪感を感じ、仕事を優先することを決断してしまった母親は、良い母親ではないということに関して罪悪感を持つし、間をとったグループはどちらにも最善を尽くせなかったという罪悪感を持つわけである。

もうひとつここで考えるべき側面は夫の役割なのであるが、日本でこういう言葉が使われるかどうか分からないが、「新しい男 (A New Man)」という言葉で語られる、家事や育児に対して積極的に責任を担っていこうとする男達なのだが、そういう男というのは(残念ながら)非常に見つけにくい。64人の夫たちを調査したのだが、何とか一人新しい男と言ってもいいかなという人が居たくらいだ。非常に鮮明に覚えているのは、ある女性が10年間結婚してきて、非常に特権的で名声の高い仕事に就いてきて、子どもを持つまでは責任も平等に持っているし、家庭は平等に保たれてきたのだが、子どもを持ったとたん彼女がまるで1950年代の女性のような生活になってしまったと気づいたことだ。

柿内(鳥取大学): 先ほどの広瀬先生の質問と関連するのだが、そうすると子どもは少なく生んでより良く育てるという方向にサービスクラスの人々も向かっているのか。子どもの数は少なく生んでお金をかけてより良く育てるというのは日本も他の国もある傾向はあるんじゃないか。少子化の中でもそういうことが言われているが、そのあたりがサービスクラスの人々もそういう傾向にあるのか。

ボール: 私達の調査では実際のところはこのグループの人たちは、イギリスの平均よりも少し多くの子どもの持つという傾向が見られた。実際、バタシーというエリアはヨーロッパ中でもっとも高い子どもの人口密度をもっている地域であり、それが社会生活にも影響を与えている。彼らは戦略的に一人の子どものしか持たないという戦略はとらない。ちなみに人口全体での子どもの数というのは、結婚したカップルの人口全体における平均的な子どもの数というのは二人より少なめ、1.9人くらいであった。これはその地域におけるレストランでも興味深い変化をもたらすもので、スターバックスで私は決して座ることが出来ない。というのは、周りはバギーで赤ちゃんをつれたお母さんばかりだからだ。バタシーにもメインストリートには妊婦さん専門のお店が

3つくらいあるし、子ども専門の靴屋さんとか子ども専門の美容院などもある。さらに子供づれの家族とくにターゲットを当てているレストランが3つくらいあり、彼らは子供向けのメニューを用意している。社会学者として社会のアウトサイダーにしているというのが私の使命であるので、私には子どもはいない。よって、私の地域社会において私は例外的存在である。

広瀬:このサンプルは、イギリス全体の中産階級の変化を代表しているということにはならないと理解していいのか。そうすると、他の要素もこの地域にのみユニークなのか、それとも他の要素はイギリス全体をレプレゼンしているのか、どのように理解したらいいのか。

ボール:いくつかの一般的な傾向は反映している地域だと思うが、別の側面では代表していない部分もある。今回はお話していないが、場所と空間という論点がここに関わってくる。これに関わってはふたつくらい別の調査があるのだが、ひとつはマイケル・サベージ (Micheal Savage) がマンチェスターで行った一連のミドルクラスに関する調査がある。彼らは4つの地域に関して調査をしていて、ひとつはバタシーに良く似ていたし、もうひとつはストック・ニューイントンに良く似ていた傾向を示していたわけだが、後のふたつはまた別の傾向を示したという結果が得られている。もうひとつの調査というのは、ティム・バトラー (Tim Butler) がロンドンで行った調査だが、それは6つの場所を扱っていた。その6つの場所のうちの2つは私達が扱ったのと同じ地域を扱っている。というのも、私たちが行った調査自体がこのバトラーが以前行った調査に基づいて対照的な傾向を示すだろうということがわかっている地域を選んだからだ。バトラーが行った調査の一つはドックランドというところで、新興住宅開発地である。そこでは結婚していないミドルクラスがたくさん暮らしている。

これら3つの調査によって明らかになることは、異なる断片グループ達というのは、都市ないしその近郊における別々の地域にひきつけられてそれぞれコロニーをなしていくような住み方をしていくということだ。もしこれらの調査にご関心があるようであれば、マイケル・サベージの著書としては、SAGE から出された *GLOBALIZATION AND BELONGING* (2004, 12) が詳しいし、ティム・バトラーの本は BERG から *LONDON CALLING* (2004, 4) という著書が出ている。私たちの調査はラウトリッジから2006年の1月に出版される予定である。

後藤:2つ質問がある。私も調査に疑問を感じてきたのが、バタシーのサンプルの取り方であるが、広い地域の全体からの無作為抽出ではないような気がするのだが。いろいろ複数の調査方法を組み合わせているような気もしたのだが、どのような調査だったのだろうか。

もうひとつは今、ミドルクラスといっているのだが、対照的にワーキングクラスと比較して物を言っておられると思う。そうするとワーキングクラスと対照的に、教育的にミドルクラスにもいろんなタイプがあるが、大まかにひとくくりにすると教育に対してこのような態度があるというお話があったわけである。そうすると、ワーキングクラスは違う態度を持っているわけで、社会学者の立場からするとそのワーキングクラスはいつまでたってもワーキングクラスの頭にしかならないだろうということ、職業構造が変化するのを待つしかないのか、それとも行政の力で何とかなるものなのか、どうお考えか。

望月(明治学院大学):確認と質問がある。大変興味を持ったのは、リベラル、コーポラティブ、モダンなのだが、これはロイヤリティ、サブカルチャー、ソリダリティ、というコンセプトで分析しようとするならば、たとえば、リベラル美学型は、医師、弁護士とか教授とか、それぞれの層の中でロイヤリティもサブカルチャー、ソリダリティもあるんだが、強弱で言えば、リベラル美学型はロイヤリティ、単純に言って、コーポラティブはソリダリティ、ポストモダンは大変に興味があるのだが、ポストモダンはサブカルチャーが軸になるような構成じゃないかと思う。そういうふうに関係構造をロイヤリティ、サブカルチャー、ソリダリティということできったときにこんなふうにならなくていいでしょう、、、ね。

ボール:実際の調査が対象としては、バタシーの中でもより小さな地域で、それはストック・ニューイントンとの比較を確保するために選んだ。実際には不動産業者が大体に通った住宅事情を持っていると指摘している地域を選んでいる。この選んだふたつの地域は、バトラーが以前行っているふたつの地域と正確に同じ地域を選んだ。サンプルというのは、この地域の子どもを持っているミドルクラスが参加しそうな活動をする場所から、それにアクセスすることによっていた。具体的には、地域の診療所とか図書室、様々な地域活動のグループ、子どもの出産にかかわるネットワーク、幼稚園などに通知を送ってサンプルを得るということをした。

確かに、家の価格に注意を払ったが、地域の特性から言って、バタシーのほうが家

の価格は高いとご理解いただきたい。というのも、もうひとつの地域である、ストック・ニューイントンは社会的に非常に混合している地域なので、必然的に家の価格も少し低い。調査においては、それぞれの家の価格を記録にとどめていくという作業をした。

その他にも階級を捉えるために3つぐらいのデータを参照したのだが、一つは国勢調査、10年ごとに政府が行っているもので、2つめが社会的な社会剥奪基準 (social deprivation index) と、そして3番目に私達はとても興味深い新しいデータを利用した。それは消費に関する調査と葉書による消費パターンを合併したものである。これはモザイクと呼ばれているシステムである。私達はこれら3つのデータを用いて地域を比較した。

ふたつ目の質問に対して、確かに社会構造の変化によって親子にとっての社会移動のチャンスは確かに存在はしているが、ワーキングクラスにとってのその可能性とミドルクラスにとってのその可能性の間にあるギャップというのは過去、何十年にわたって変わっていないというのが現実である。

3番目の質問に対して、断片グループごとに今指摘されているような要素との関連性があるのは確かで、ただ私自身はソリダリティというより社会性 (sociality) という言葉を使いたい。サブカルチャーということに関しては、ブルデューが指摘したような消費パターン、映画や音楽などの消費パターンに違いが見られるということである。車の消費に関してもパターンが見られ、私の地域のたくさんの人がBMWとか大きい車を持っていて、それを子どもを学校に連れて行くのに使う。

大田: 論議が分散したような感もあるし、私のほうの問題提起が分散していたこともあると思う。民主主義が危機だといった時に、その民主主義を支えているのがむしろ中間層である、あるいはミドルクラスサイズであるということが、今日本でも言われていて、そこが消滅しているような危機感があるとあるコメンテータが言っていることに対して、ある意味で日本では、進学率が高いが学びからの逃走とかいろんな問題が起こっているときにそういうことが起こっているのかなと思ったりもしていたが、今日のボール先生の分析を聞いて、むしろイギリスでも不安定になっているミドルクラスサイズが増えているならば、かなり社会は流動的になるし、不安定になっていると思う。なおかつ、社会上昇移動のパーセンテージは30年間変わっていないという指摘が先ほどあったが、そうすると教育の機会均等原則とはいったいなんだったんだろうかと今までのリーディング・セオリーなり概念なりをもう一度捉えなおさなければな

らないような気がして、今日は聞いていた。私にとってはとても勉強になったが、まだ大きな疑問に答えてもらってないので、それについては今後お話していきたい。

上田：遠路はるばる非常に忙しい中ロンドンから来ていただいたスティーブン・ボール先生、それから通訳をやっていただいた西岡さんと中島さん、今日のコーディネート、企画すべてをやっていただいた大田さん、会場提供していただき、いろいろご配慮いただいた谷川さん、以上の方々に対して会場から拍手をお願いいたします。

ボール：お招きいただき、また温かく迎えていただきありがとうございました。熱心なご聴講をいただきありがとうございました。

(記録：中島 千恵)